

藤原宮出土のヘラ描き瓦

これまでに藤原宮で出土したヘラ描き瓦について集成し検討を加える。藤原宮出土ヘラ描き瓦には、あきらかに文字を刻んだものもごく少数認められるが、これらは文字の判読を必要とするため別途検討することとし、ここではそれ以外の記号瓦をあつかう¹⁾。なお、わずかに出土している刻印瓦も、あわせてここで報告する。

総点数は1163点である(表10)。このうち、記号の種類が判別できた瓦の点数は444点(38%)で、その内訳は、軒平瓦が22点、道具瓦(熨斗瓦)1点、丸瓦85点、平瓦335点である。出土地点別では、宮中枢部の大極殿院・朝堂院での出土量が突出している。とくに、24万点に上る瓦が出土した朝堂院東第六堂で最も多い。このほかには東面北門・大垣での出土量が多い。このように、瓦の出土地にはかなりの偏りが認められる。

記号別では、「+」「×」「ナ」「キ」「∨」「F」・「ノ」「×」に加え、格子状のもの、縦画を1～3本、横画を1～5本・9本・23本刻んだもの、あるいはそれらが組み合わさったものを確認した(図78)。大半は「+」「×」²⁾で(表11)、それぞれ104点・103点あり、両者が1つの瓦に記されたものが1点ある。これに次ぐのが「キ」で84点確認した。この三種類だけで292点を占める³⁾。「ナ」や、「∨」を「+」「×」の変異、「F」が「キ」の変異とすれば、これらを合わせて303点が「+」「×」「キ」により占められることになる。

表11には、多数のヘラ描き瓦が出土した、第27・136・144・153・160・163次調査区の詳細をまとめた。第27・153・160・163次調査区では平瓦凹面(特にその中央付近)に「+」「×」「キ」の記号を施すものが多いに対し、第136・144次の場合、軒瓦では凹面瓦当付近に、丸瓦では凹面に、平瓦では凹凸両面に「+」「×」および並行する1～5本の横画を入れるという特徴がある。

こうした差異が生じた背景には、両者の出土瓦を供給した瓦窯の違いがあると推察される。前者では、第27次を中心にN/Pグループと呼ばれる、砂粒を多く含んだ胎土に特徴を持つ瓦が多く、胎土に「クサリ礫」を多く含む高台・峰寺瓦窯産の瓦がこれに次ぐ。N/Pグループも高台・峰寺瓦窯産とする見解にもとづけば⁴⁾、以上

のヘラ描き瓦は、ほぼ高台・峰寺瓦窯から供給されたとわかる。一方、後者は焼成が硬質からやや軟質で灰白色の精良な胎土に特徴をもつ西田中・内山瓦窯産の瓦が多く、高台・峰寺瓦窯産の瓦も認められる。つまり、種別を判定できた藤原宮出土ヘラ描き瓦の大部分の供給元が、高台・峰寺瓦窯と西田中・内山瓦窯であることが判明した。可能な範囲でヘラ描き瓦を瓦窯別に分類し、詳細をまとめたものが表12である。

「+」「×」は特定の瓦窯を示す窯印と考えられたこともあったが、以上の検討によると、複数の瓦窯を超えて同一の記号が用いられている。したがって、すでに指摘があるように、これらを窯印とはみなし⁵⁾がたい。

さて、藤原宮の造瓦にあたったのは大和盆地外を含む多数の瓦窯であった。盆地内では日高山瓦窯やN/Pグループの時期の高台・峰寺瓦窯の操業が古く、安養寺瓦窯、西田中・内山瓦窯、クサリ礫を多く含む時期の高台・峰寺瓦窯が新しいといわれる。ほとんどのヘラ描き瓦は、盆地内瓦窯産の瓦に限られており、それは盆地内瓦窯で長く中心的役割を果たした高台・峰寺瓦窯、および宮中枢部造営に際して新設された西田中・内山瓦窯に集中する。これらのことは、中央が直接的に掌握する奈良盆地内の中心的瓦窯において、ヘラ描き瓦が多数生み出されたことを意味していると考えられる。その具体的な背景の解明が今後の課題に定められる。

なお、藤原宮造営の最終段階まで操業されていた西田中・内山瓦窯産の瓦には、丸に十の字の刻印瓦が認められる。同時代では、他に本薬師寺で四角に右の字の刻印瓦が知られているが、藤原宮所用瓦として管見に触れたのは丸に十の字の例だけである。奈良時代以降に一般化する刻印瓦が、藤原宮造営終盤に西田中・内山瓦窯で出現している点は示唆的といえよう。(森先一貴)

註

- 1) これらも文字である可能性は否定しないが、記号(文字含む)の「意味」は、次の検討課題としておきたい。
- 2) なお、「+」は二直線が直角に交わるもの、「×」は直線が鋭角で交わるものとした。
- 3) この傾向は、藤原宮から選ばれたとみられる平城宮出土ヘラ描き瓦と同じ傾向である。山崎信二「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所、2002、259～286頁。
- 4) 石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究Ⅴ』奈良文化財研究所、2010、136～203頁。
- 5) 註3 山崎論文。

